

特集論文

コロナ禍における小学校外国語教育の新しい学習様式

—感染予防に配慮したコミュニケーション活動を構想して—

New Learning Style of “Foreign Language” Education at Elementary Schools in Coronavirus Chaos
: Design of the Communication Activity in Consideration for the Infection Prevention

藤本 典子

FUJIMOTO Noriko

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

受理日 令和3年1月31日

抄録:「小学校外国語科・外国語活動のコミュニケーション活動はコロナ禍の現状においてどのようにすれば感染予防に配慮しながら円滑に進められるのか」「時間数減の中、小学校外国語科・外国語活動の単元はいかにして進めるのがよいのか」という視点から、再度新学習指導要領や文部科学省の衛生管理マニュアルを読み直し、その重点について再考した。著者が参観したり関わったりした和歌山市の小学校外国語教育の授業実践の事例から、コロナ禍におけるコミュニケーション活動を捉え直す必要性について見出すことができた。

キーワード: コロナ禍、感染予防、小学校外国語教育、4技能5領域、コミュニケーション活動

1. はじめに

日本は経済、政治をはじめとした様々な分野においてグローバル化が進み、今後子どもたちの外国との接触は不可避である。さらに環境問題や食糧問題など地球規模の問題を解決していくことも求められており、国際共通語として中心的役割を果たす「英語」によるコミュニケーション能力は益々必要性を増す。

著者自身が開始当初から携わってきた和歌山市内の小学校での外国語教育は、めまぐるしく変化してきたと感じている。そしてついに、2020年度より小学校中学年に外国語活動、高学年は教科として外国語科が導入され、小学校における外国語教育の枠組みが大きく変更された。文部科学省は、「次期指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ 平成28年8月」において、外国語教育の課題として「学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができない」と、小・中学校、中・高等学校の連携の必要性を示唆している。さらに、小学校の実態として、昨年度までの小学校外国語活動の目標が「慣れ親しみ」であったために、2年間の活動を経験して何ができるようになったかを児童が自覚しにくいこと、中・高等学校の実態として、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーショ

ンを行う目的や場面、状況等に応じて適切に表現することに課題があることを指摘している。

これらの課題を受けて新学習指導要領では、全ての教科等の目標及び内容が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で再整理された。外国語活動、外国語科の目標や内容は、各学校種間の学びを接続させると共に、外国語を使って何ができるようになるかを明確にするという観点から設定されている。つまり、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランスの重視、授業時数の増加等、様々な面で改訂がなされ、本年度より意欲的な一年がスタートするはずであった。

そんな矢先、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、世界がそして学校教育現場が一変してしまった。各自治体では長い臨時休業措置が実施された。都道府県により違いはあるが、例えば和歌山市では前年度3月からの臨時休業が継続し、6月1日からやっと公立小・中学校が再開された。しかし、学校現場では、年間指導計画や授業時数の見直し、感染症対策、とりわけ教員による登校時の検温や放課後の消毒作業といった対応に追われ、先が見えない状況が続いている。

そこで本稿では、「小学校外国語科・外国語活動のコミュニケーション活動は感染予防に配慮しながらどのようにすればコロナ禍での現状において円滑に進

められるのか」「時間数減の中、小学校外国語科・外国語活動の単元は、いかにして進めるのがよいのか」という視点から、再度新学習指導要領や衛生管理マニュアルを読み直し、その重点について捉え直し、以下、和歌山市小学校の外国語教育の実践を概観する中で、感染予防に配慮した新しいコミュニケーション活動について考えたい。

2. 本研究の目的と方法

2.1. 目的

本研究の目的は、小学校外国語科・外国語活動の授業を実施する際に、特にコミュニケーション活動はコロナ禍での現状においてどのようにすれば円滑に進められるのか、時間数減の中、小学校外国語科・外国語活動の単元はいかにして進めるのがよいのかを和歌山市の実践事例から探ることにある。そして予期せぬコロナ禍の中、新学習指導要領が本年度より全面实施され、小学校高学年で小学校外国語科の教科化がスタートしたが、現状における課題を明確にし、コミュニケーション活動を捉え直すことから小学校外国語教育の新しい学習様式について整理したい。

2.2. 方法

文部科学省により公開されている新学習指導要領や衛生管理マニュアル「学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について（通知）」を読み直し、その重点について再考する。また、筆者が参観したり関わったりした和歌山市立小学校の外国語科・外国語活動の授業実践の事例を取り上げ、その実施形態と感染予防に配慮したコミュニケーション活動を概観する。さらに、各実践者に聞き取ったことをもとに実践上の課題について整理していくことにする。

3. 小学校の外国語教育の改革

2013年12月文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が示された。この実施計画には、小・中・高等学校を通した英語教育全体における言語活動の重視、高度化、抜本的な充実が示されている。英語の目標は世界で広く用いられる英語能力指標であるCEFRを基に設定され、小・中・高校種間の学びを系統的に示している。

新学習指導要領の特徴としては、将来の予測が困難であり、変化の激しい社会を生き抜くために育むべき資質・能力を、学習者の視点で、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等、の3点から整理している。つまり、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の重要性が強調されているのである。小学校3・4年の外国語活動では

年間35時間実施し、「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」、5・6年は教科外国語科として年間70時間実施し、「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」に、「読むこと」「書くこと」の2技能が加わった。

4. コロナ禍における小学校外国語科・外国語活動の制限内容

2020年6月5日、文部科学省から「学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について（通知）」が出され、同年7月17日に第二報として以下の太字の部分が更新されている。

⑬外国語

○音声を開いたり話したり、またそれらを通して十分に慣れ親しんだ語句や表現を段階的に読んだり書いたりして学習していくという、外国語科での学習の特質を踏まえて、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やり取り〕〔発表〕」、「書くこと」の各領域の言語活動については学校の授業で取り扱うことが基本となる。

○その上で、例えばQRコード等で動画や音声の視聴ができない児童への配慮を行った上で、教科書記載のQRコード等を活用して、学校の授業以外の場で、動画や音声を視聴して、概要をとらえたりわかったことを書いたりして、次の授業の活動につなげることが考えられる¹⁾。

○また、学習した表現等を繰り返し使うという外国語科での学習の特質を踏まえ、ある単元で学習する予定となっている学習内容の一部を、別の単元の授業で指導するといった工夫が考えられる。(文部科学省、2020、p.9、太字は著者による強調)

「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」の領域の中で特に活動の制限によって実施が難しいのは「話すこと」「聞くこと」である。従来の小学校外国語科・外国語活動ではコミュニケーション活動で伝え合ったり、人の話に耳を傾けたりして進めることが中心にあったからである。文部科学省では「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」2020.9.3.ver4を以下の通り示している。

各教科における「感染症対策を講じてもおお感染のリスクが高い学習活動」として、以下のような活動が挙げられます。「★」はこの中でも特にリスクの高いもの

- ・各教科等に共通する活動として「児童生徒が長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等」及び「近距離で一斉に大きな声で話す活動」(★)
- ・理科における「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」

- ・音楽における「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」(★)
- ・図画工作、美術における「児童生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」
- ・家庭、技術・家庭における「児童生徒同士が近距離で活動する調理実習」(★)
- ・体育、保健体育における「児童生徒が密集する運動」(★) や「近距離で組み合ったり接触したりする運動」(★)¹³⁾

また、新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応については、幼小中高・特別支援学校に関する情報(文部科学省)の『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～(2020.6.16 Ver.2)』によると、「第3章 具体的な活動場面ごとの感染症予防対策について 1. 各教科等について」(p.36)では、各教科における「感染症対策を講じてもおお感染のリスクが高い学習活動」として6例を挙げている。小学校外国語に特化した具体例はないが、6例をまとめると、感染予防策として、以下の2つの制限を考慮した活動が求められることになる。つまり、この中では6例に共通する2つの制限が示されている。

- ・距離・・・近距離での活動(児童の密集、接触など)、長時間にわたり対面形式となるグループワークなど
- ・声・・・近距離で、一斉に大きな声で話す活動など

5. ガイドラインを踏まえ、感染予防に配慮した小学校外国語科・外国語活動の実践事例

小学校外国語科・外国語活動の言語活動が本来の目標から外れないようにしながら、学習活動を成立させる工夫が必要である。そして、年間授業時数が例年よりも少ない状況を考えると、このような状況だからこそ成立する効果的な学習はないかと考える。そこで新たな『話すこと・聞くこと・書くことの授業の創造』について考えたい。

5.1. コミュニケーション活動の工夫

感染防止のためには、コミュニケーションの在り方を再確認する必要がある。フィジカル・ディスタンシング(本稿では世界保健機構 WHO の推奨により以下フィジカル・ディスタンシングの表現を使用)を踏まえ、声・距離に配慮した机椅子の配置を配慮したコミュニケーション活動を工夫している。図1は3年生の外

国語活動の領域「話すこと(やり取り)」で机の配置を工夫した学習場面である。



図1 グループワークの工夫

5.2. 感染予防に配慮した Activity

感染予防に配慮し、試行錯誤しながら、笑顔で対話を楽しめる授業や実施可能な活動を考えている。だが、以前のようにカードをペアやグループでシェアすることは難しいので、個人で活用させ、アクティビティも教科書通りではなく、どう置き換えるかなどの工夫が必要となる。



図2 Activity の工夫

5.3. 授業形態の工夫

ペアやグループ活動での学び合いが推奨されつつある昨今、教員対児童の一对多授業のメリットも再考してみたい。一斉学習は、基礎的・基本的な事項の説明や指示などによって、教師から直接的に働きかけ、知識や技能を伝える際に効率的である。また、グループ学習で出された意見を学級全体で整理・確認、比較検討していく場合にもこの形態が基本になる。一斉学習やグループ学習の前に個別学習の時間を取り、自分自身で考えさせたり、グループ学習の途中や一斉学習の後に振り返らせたりすることも重要である。集団での学習場面だけでなく、個別学習の場面を設定することで学習効果が上がることを見直したい。小学校外国語教育ではコミュニケーション活動「名刺交換」や「インタビューゲーム」などの Activity が取り入れられることがある。従来行ってきた教師と児童の距離感を

基準にして、「児童一人対全員」に置き換えた活動に変更することも十分に可能である。



図3 一対多授業の場面

5.4. ロボットと学ぶ外国語活動

和歌山市内の小学校で試験的にロボット Kebbi を導入している事例である。

Let's Try! 1 Unit3 How many? 「数えて遊ぼう」の授業で、Kebbi と児童がじゃんけんゲームをしている場面である。



図4 Rock, Sissors, Paper, 1, 2, 3



図5 Let's sing "Goodbye song"

外国語活動で毎時間取り入れられることが多い「Hello Song」「Goodbye Song」「Ten Step」などの歌を Kebbi と一緒に歌っている場面である。動作をつけて歌を歌ったりする場合、画像と Kebbi の動きに合わせ学習効果を上げている。



図6 Let's sing "Ten Step"



図7-1 児童と Kebbi のやり取り①



図7-2 児童と Kebbi のやり取り②

図7-2は、Let's Try! 1 Unit5 "What do you like?" 指導者と Kebbi の Small Talk の場面である。

指導者：What fruit do you like?
Kebbi：I like grapes.

既に英語の授業に活用できるロボットは各社によって開発が進められ、発売当初よりかなり安価に購入できるようになっている。

英語学習 AI ロボット「Musio」は開発が進み、使うたびに学習して情報を蓄積して（成長する）、声と顔によって相手を識別し、会話内容やバッテリーの状態に応じて自分の感情を表すことができる（正面のディスプレイに表示される両目の形などを変化させる）などの機能が追加されている。サイトには本ロボッ

トの同志社中学校の事例などが公開されている。

このほかにも導入例がネット上でいくつか公開されているが、一人1台の環境が確保できれば、個別学習や発音チェックなどに活用できるメリットがある。ただ学校の集団学習の場での活用では、さらなる検討が必要である。

5.5. 「話すこと（発表）」＋「書く」の領域における学習活動の工夫

ここでは新たな「話すこと・書くこと」の授業の創造の事例として、「書くこと」を通してのコミュニケーション活動を考えてみたい。

「思い出ワークシート回し読み」は、音声を介さないで気持ちを伝えることが可能なコミュニケーション活動である。「誰に」「何を」「どうやって」伝えるかを常に意識させることで、内容が充実する。コロナ禍においても、児童同士そして教師と児童もきずなをより強め、学び合いが充実するような授業環境をつくってきたい。

表1 My School Trip の単元例

単元	My School Trip (Junior Sunshine Lesson6 My Summer vacation)
改善点	修学旅行の思い出を交流する活動においては、近距離でのやり取りが感染予防の配慮を必要とする部分になる。そこで、近距離での一对一の対面のやり取りを、普段の一斉授業における教師と児童の距離感を基準に置き換えた活動に変更する。
単元のゴール	思い出の文や内容を交流し、英語で発表する。
評価規準(例)	活字体を用いて、ワークシートに修学旅行の思い出を英語で【書いている《思・判・表》/書こうとしている《態度》】
活動(例)	・修学旅行の思い出ワークシートを英語で記入し、友達と回し読みする。 ・相手に伝わるように修学旅行の思い出を英語で発表する。【話すこと 発表《行動観察》】

このような修学旅行の思い出の交流の方法であれば、[思い出の内容を交流する、アルファベットの活字体を用いて夏休みの思い出を書いている（書こうとしている）]という【評価規準(例)】から外れないため、問題はない。勿論、評価規準を満たしているということだけでなく、修学旅行の『思い出ワークシート』の交流の先にあるもの、つまり自分のことを英語で表現すること、子ども同士が英語を通して理解し合い、人間関係を深めていくことが、コロナ禍の状況においても大切にしたい授業のポイントである。このことについては、「目標設定を明確にし、新たな活動や単元の構想」「知識・技能と思考・判断・表現のバランス」「この状況を踏まえた教材化」の3点に留意しながら取り組みたいところである。



図8-1 「思い出ワークシート」回し読み



図8-2 Writing でコミュニケーション

6. コロナ禍における小学校外国語科・外国語活動の課題

ここで先述の実践事例と併せてコロナ禍における「小学校外国語科」の授業成立と評価の可否について一覧表に整理した（資料1参照）。新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について幼小中高・特別支援学校に関する情報（文部科学省）の「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2020.6.16 Ver.2）」に挙げられた制限事項である「声」「距離」については前述の実践例から感染予防に配慮したコミュニケーション活動が構想できたと言える。しかし、実践例から見たさらなる問題点や課題もある。



図9 Let's Try! 1 Alphabet の発音指導
(口形を見せる時にはマウスシールドを使用)

6.1. 環境設備面での課題

和歌山市内の小学校で英語が導入された始めた20年近く前になるが、その当時はICTやデジタル教材を活用する場面は少なかった。筆者の当時勤務していた和歌山市立城北小学校（現・伏虎義務教育学校）では、ALTや地域人材の活用、外部英語教育機関の人たちと共に授業を実施していた。また、ICT活用という面では、Skype等を使用してオーストラリアの学校と交流するくらいの実践しかなかった。現在は英語教育の場面でICT活用が進み、最近ではMusio（ミュージオ）X7のロボットの導入事例がネット上で公開されている。

慶應義塾中等部の実際の授業では、単語や表現パターン、会話フレーズを反復練習しながら身に付ける「Academy mode」を活用して、生徒一人ひとりの発話量を増やし、アクティブラーニングを促しながら英語学力向上を目指していくことが紹介されている。

また、明星中学校・高等学校の実践事例も紹介されている。明星中・高等学校では、現在週5コマある英語の授業時間内で、概ね週2回ロボットを利用しているというⁱⁱ⁾。「生徒が自由に使える時間を増やしていき、生徒の発話量を増加させるとともに、『(非人間との)リアルな英会話』を通して『実践で使える本物の英会話力』を養っていく」ことを目的としている。今後は、授業以外での活用も視野に入れており、AIロボットと共生している環境を整えることで、生徒の「Musio」への興味関心を高めるとともに英語学習およびAIやICTへの興味関心も高めたいという。

本稿で既に紹介したロボットKebbiの実践事例は文部科学省配信教材Let's Tryのデジタル教科書をコンテンツ入力し、Kebbiとじゃんけんゲームをしたり、いっしょに歌ったりする主として音声指導面での外国語活動である。財政面からALTの雇用ができなかったり、雇用しても時間数が少ない自治体も多い。ALTの雇用と比較するとはるかに安価に利用できるロボットの購入を考える自治体も増えることは十分予測できる。今後AI導入により、さらに進化したロボットが開発されることも考えられる。しかし、ここで4つの課題が想起できる。1つ目は授業における教師の立ち位置や教員と人型ロボットとの協働授業の在り方である。2つ目は学習カリキュラムに合わせたコンテンツ制作の問題である。3つ目はリアルな英会話であってもあくまでも非人間であるという点である。ALTと児童が英語を通して理解し合い、人間関係をつくっていくこと、文化の交流や日本の文化との差異について国際理解教育の視点で学んでいたことがロボットで可能であるのかという点も危惧される。4つ目は個々の発音練習や一斉指導など授業のどの場面に導入するかによる必要台数確保のための財源である。

図10で示されているように外国語活動等において

ICTを活用している学校の割合が年々増加し、活用されているICT機器としては、デジタル教材が圧倒的に多い。令和2年度からの検定教科書には、各社ともにデジタル教材が用意されている。ICTが苦手な教員にとってはこうした機能を使うことに苦痛を感じることもある。しかし、デジタル教材は指示や説明が簡単に行えるうえに、モデルとなる音声や動画を簡単に提示することができ、英語指導取り分け音声指導に苦手意識を持つ教員にとっては、とても助けになるツールである。電子黒板を使用してデジタル教材を用いたメリットとして、神林（2011）は、以下の3点を挙げている（pp.52-53）。

- ・子どもと同じ方向、同じ画面を見ながら説明できることで、子どもと同じ視線で授業を行うことができ、子どもたちと向き合う時間がより長くなる。
- ・アイコンをクリックするだけでテンポよく音声や動画を提示できるため、子どもたちの関心や集中力を持続させることができる。
- ・それぞれの学習活動の大大画面提示やワークシートの書き込み例などもあり、指示や説明を簡単に行うことができる¹⁾。

これらの点から、教員の負担を軽くし、臨場感のある言語使用場面を児童に提供する助けとなるデジタル教材は、教師・児童双方に多くのメリットがあると言える。しかし、操作に手間取ったり、教師が機器を操作するだけの授業になってしまったり、デジタル教材の利点を十分に生かすことができない。あくまでも授業の補助のためのツールの一つであり、授業の主役は児童であり、教師が児童の学びをコーディネートする存在であることを常に心に留めておきたい。また、今後の課題として、デジタル教材を活用した効果的な指導に焦点を当てた研究を行っていく必要がある。

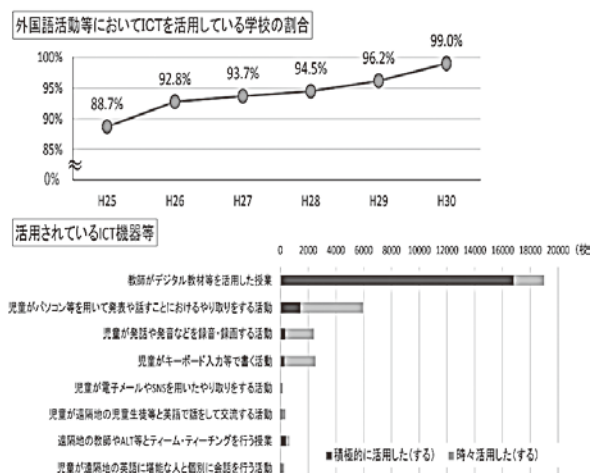


図10 外国語活動等におけるICT機器の活用状況
(出典：平成30年度英語教育実施状況調査（小学校）
文部科学省)

6.2. 授業時数の課題

ここで4で述べた文部科学省「学校の授業における学習活動の重点化に関する資料」欄の「学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について（通知）」「小学校第6学年の具体例（p.9 ③外国語）」（2020.7.17）を再度確認していただきたい。

先述の通知を踏まえ、一斉休校や分散登校のため、夏休みを返上して授業時間を確保した自治体が多いことから、今後さらに家庭学習と連携した学習の必要性が挙げられる。小学校外国語教育「話すこと（発表）」や「書くこと」の領域では、家庭学習でも繰り返し学習することで効果が上がる。QRコード等で動画や音声の視聴環境の整備が整い、家庭との連携が深まることを期待する。また、同じ言語材料を繰り返し使用するという外国語教育の学習の特性を生かし、組み合わせ方を考量した単元構成の再編成が課題となる。つまり、この難局に注目したいのが、カリキュラム・マネジメントである。教育課程や時間割の編成で多様な工夫が求められる。例えば、年間指導計画などの再編成である。年間授業時数の見込みを計算したうえで全教科の指導計画を見直し、関連する単元の統合や指導内容の精選した改善案や教科ごとの見直しのプロセスを明確にする必要がある。

6.3. 指導と評価の整合性の課題

令和2年4月、小学校では、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』（文部科学省、2017）が全面実施された。しかし、評価の拠り所となる『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所、2020）が示されたのが3月26日であった。学校教育現場では評価の研修もままならず、新年度がスタートしてしまった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大も相まり、現場は混乱を来している。筆者が共同研究をしている小学校でも、評価方法について悩んでいると聞いている。

しかし、【資料1】で示したように、感染予防の配慮が必要とされるコミュニケーション活動は一部のみということがわかる。領域として難しいのが、「話すこと（やり取り）」である。各Unitの個々の言語活動が感染予防のための配慮の必要な活動であれば、代替の指導案を検討することになる。外国語における言語活動は「近距離で声を出す」ことに重点をおく言語活動だけではない。例えば「Story Time」「英語の物語や絵本」「文字遊び」など英語という言葉そのものに向き合うことができる活動がある。Unitの内容を再度見つめ直し、普段あまり時間をかけられない言語活動にスポットを当てられる良い機会となる。

ただ既存の活動に感染予防の工夫を施すときには活動本来の目標から外れないよう注意したい。逆を言えば、目標や評価規準から外れない限り、あらゆる工夫

が可能となるのである。

6.4. 指導者の小学校外国語の指導力についての課題

菅（2019）によると、「予定では、2023年3月に卒業した教師になる学生は、教員免許状の中に、外国語を教えることのできる資格が付与される。それは、学習指導要領改訂に伴い、大学のカリキュラムが刷新され、小学校の免許状を得るには、初等教科教育法「外国語」や外国語科「英語」を修得することが義務付けられている。」（p.7）¹⁰⁾とあり、今後は小学校教育から英語を切り離しては考えられず、「英語は苦手なので」「英語の免許を取得していないので」「ALTが来ないとできない」は通用しない時代が今まさに到来している。図11に示されているように、ALTを授業で活用する時数の割合は年々増加傾向にある。しかし、学級の児童の実態を一番よく把握できている学級担任が主体となり、児童の学びをコーディネートするというスタンスは大切にしたい点である。

小学校教育は学習者の発達段階や既存の知識や他方面での経験値が少ないことから、中学校以降の教科担任制の学習とは大きく異なる。複数の教科を担当が教えることが大変重要になる。小学校で英語教育が実施されることで、算数、国語、理科、社会、音楽、体育、図工、家庭科など他教科に変化が起きるような英語教育を実践していくことが何よりも重要である。

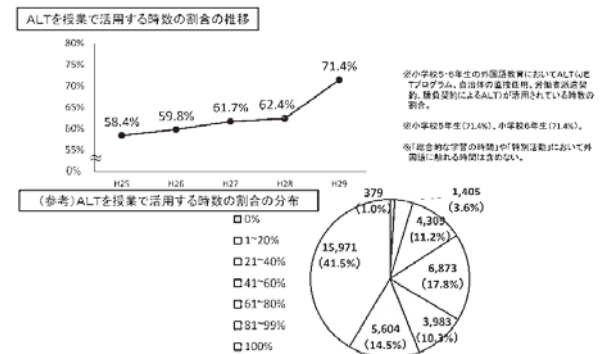


図11 外国語指導助手（ALT）等の活用授業時数
（出典：平成30年度英語教育実施状況調査（小学校）
文部科学省）

7. おわりに

文部科学省リーフレット「生きる力 学びのその先へ」改訂に込められた願い小学校2020年度には、この4月に全面実施となったばかりの新学習指導要領の改訂に込められた思いとして、「これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。」と示されている¹⁶⁾。新学習指導要領には「感染予防に配慮した学習活動」などといった文言は一文もなく、今ま

さに起こっている予測困難な状況の下で、いかに自ら学び、考え、判断して行動するのか、著者たち教育に携わる者は試されていることになる。

コロナ禍において、各学校では卒業式や入学式が簡素化を余儀なくされた。運動会も入場制限をしたり、半日で済ませるなど規模を縮小した学校が多い。これを機会に「コロナ後」も見据え、学校行事の精選を考える必要性を感じる。教員の働き方を含め、長期化を念頭に置いた学校運営が今まさに求められている。

著者たち教育に携わるものにとって新学習指導要領実施後、早速到来した新しい教育への課題として、引き続き学校教育現場との連携深めながら、コロナ禍でも豊かな学びを実践できる小学校外国語教育の新しい学習様式のモデルとして、発展させていきたい。

注

- i) https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503_00001.htm 参照
- ii) 明星中学校・高等学校の事例（2017）、
<https://ictenews.net/2017/05/01meisei/>

参考資料・引用資料

- 1) 神林裕子（2011）「電子黒板とはどのようなものですか？メリット・デメリットは？」 萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生（編著）、「小・中連携Q & Aと実践：小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント」、開隆堂出版（pp.52-53）
- 2) 文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
- 3) 文部科学省（平成28年度）「次期指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」
- 4) 明星中学校・高等学校の事例（2017）、
<https://ictenews.net/2017/05/01meisei/>
- 5) 英語学習用 AI ロボット「Musio」、
<https://themusio.com/home>（2018）
- 6) 柳 善和（2018）、「ロボットと学ぶ英語学習」The English Teachers Magazine April Information Technology Guide No.193
- 7) 文部科学省（平成30年度）、「英語教育実施状況調査」
https://www.mext.go.jp/content/20200710-mxt_kyoiku01-100000661_3.pdf
- 8) 慶應義塾中等部の取組（2019）、<https://ict-enews.net/2019/09/18musio/>
- 9) 同志社中学校の事例（2019）
<https://ledge.ai/airobot-english-study>
- 10) 菅正隆（2019）、明治図書、「小学校外国語活動・外国語授業づくりガイドブック」（p.7）
- 11) 菅正隆（2020）、「新3観点の評価づくり 完全ガイドブック」、明治図書
- 12) 文部科学省（2020.7.17）、「学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について（通知）第2報」
- 13) 文部科学省（2020.9.3 Ver.4）、「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～」
- 14) 国立教育政策研究所（2020）、「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」小学校外国語・外国語活動
- 15) 文部科学省参考資料（2020）、「新型コロナウイルス感染防止下における外国語教育の取組について」
- 16) 文部科学省（2020）、「学習指導要領「生きる力」リーフレット

【資料1】表：コロナ禍における「小学校外国語科」の授業と評価について（著者作成）

領域	目標	授業成立の可否	評価の可否
聞くこと	<p>ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。</p> <p>ウ ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。</p>	○ 話し手と聞き手のフィジカル・ディスタンスを確保して、活動することが可能である。	○ 聞く活動から話す活動へ繋げたいのでデジタル教材の活用が有効である。 聞くテストやワークシートなどの記述内容を観察することなどにより可能である。
話すこと やり取り	<p>ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。</p> <p>イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問したり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。</p>	△ 話し合う中で考えをまとめたりしながら、児童同士が言葉のやり取りを繰り返す必要があり、対面式が基本となるので難しい。	△ 児童同士が話し合う活動を見取ることが評価の基本であるため、難しい。
話すこと 発表	<p>ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。</p> <p>イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。</p> <p>ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。</p>	○ 発表者と聞き手のフィジカル・ディスタンスを確保して活動すれば可能である。	○ 題材設定のメモや、発表者が伝える様子の観察をすることなどで可能である。 全体の中で実施すれば、相互評価も可能である。
読むこと	<p>ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。</p> <p>イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。</p>	○ 個人の活動にし、フィジカル・ディスタンスを確保し、声の大きさに配慮すれば、可能である。	○ 個別に聞き取り、観察することにより可能である。
書くこと	<p>ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。</p> <p>イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。</p>	○ 教材は共有せず、個人の活動にすれば可能である。	○ メモやワークシートを観察することなどにより可能である。 フィジカル・ディスタンスに配慮しながら、回し読みなどの活動形態も工夫することにより可能である。

【資料2】 表：コロナ禍の小学校外国語活動 Activity の新しい様式（著者作成）

Activity	内 容	導入の可否と改善点
Keyword Game	キーワードを決め、ペアになり真ん中に消しゴム等を1つ置く。教師がキーワードを発音した時に消しゴムを先に取った方が勝ちになる。	× 同じ消しゴム等を共有し、取り合う時に身体接触があり、夢中になるとフィジカル・ディスタンスが保ちにくくなる。 【改善点】教師対児童にするなど、ルールを工夫することにより可能である。
Missing Game	絵カードの発音を確認しながら、黒板に何枚かを掲示する。児童が目をつぶっている間に、1枚の絵カードを取り、それが何のカードかを当てる。	○ 身体的な接触がなく、フィジカル・ディスタンスが保てるので可能である。 【改善点】教師と児童の席の距離に配慮する。
Interview Game	テーマを決め、教室内を自由に歩き回って、聞きたい相手にインタビューする活動である。	× 密接・密集になりやすいので、基本的に全員で行うことは難しい。 【改善点】フィジカル・ディスタンスを保ちながら、隣の席や前後の席、斜めの席などのペアで行うことにより可能である。
Let's Chant Let's Sing	教科書のデジタル教材に収録されている歌や語句・表現等に慣れ親しませる活動である。	○ マスク着用による息苦しさがあるものの可能である。 【改善点】以前のように元気で大きな声で歌ったり発音することを求めないようにする。自分が聞き取れる音量を基準にする。
Pointing Game	教科書や絵カード等を開き、教師が発音した語句を指で指すゲームである。	○ 以前はペアで行うことがあった活動であるが、個人の活動にすることで可能になる。 【改善点】カード共有せず、身体的な接触がないよう一人の活動にする。
ドンジャンケン Game	黒板に絵カードを一行に8～10枚くらい並べて貼る。両端から絵カードに順にタッチしつつ、その単語を言いながら中央に進む。相手に出会ったところで、ジャンケンをする。勝ったら、そのまま相手の陣地に進む。負けたら自分の列の後ろに並び、次の児童が同様に端から絵カードをタッチして、中央へ進む。	× 身体的接触があり、密になるゲームなので難しい。 【改善点】授業をT.T.で行い、T1とT2の2チームに分け、教師が示したカードの単語をチームの児童たちが発音し、教師がジャンケンをするというやり方に変更することで可能になる。
Stereo Game	前もって黒板に使用する絵カードを掲示しておく。前に数人の子どもが一行に並び、使用する英単語の中から、一つの英単語を割り当て、同時に言う。聞いている児童が、だれがどの語句を言ったのかを当てるゲームである。	○ 身体的接触がなく、距離感が保てる活動のため、実施可能である。 【改善点】マスク着用のため、口形が見えず、声が聞きづらいことがあるため、授業への効果を考慮して導入する必要がある。